

かまくら 女性史の会 Newsletter

第 129 号

2025 年 7 月 19 日 発行

〒248-0012 鎌倉市御成町 18-10

NPOセンター鎌倉 気付

メールボックス 26

E-mail: syokmat@yahoo.co.jp

《平岡豊子と写真集『トランクの中の日本』》

平岡豊子（1927～2024）は、幼少時から高等女学校入学前までアメリカ、イギリスで過ごし、英語が堪能であった。40 歳代前半から鎌倉市関谷に住んでいたが、20 年ほど前東京のマンションに移り、2024 年 96 歳で亡くなられた。彼女の大きな功績の一つに、1995 年小学館から出版された米従軍カメラマンの非公式記録写真集『トランクの中の日本』の翻訳がある。

当時 23 歳のジョー・オダネルは、アメリカ海兵隊従軍カメラマンとして、1945 年 9 月 2 日、長崎県佐世保近くに上陸した。軍の命令で空襲による被爆地を撮影する傍ら、自身も現地で入手した私用カメラで佐世保、長崎、広島、神戸他 50 以上の市町村を 7 か月かけて撮影、爆心地で出会った大人や子どもたち、瓦礫となった街の様子を多くのネガに残していた。オダネルは帰国後、日本で見た悪夢のような被災地の状況を忘れようと、自ら写したネガはトランクに納めカギをかけた。それから 20 年後、爆心地を歩き放射能を浴びたことが原因で原爆症を発症、度重なる手術に耐え身体は楽になったが、日本で見た情景から心は解放されることはなく、意識に焼き付いたイメージは一層彼を苦しめた。

90 年、自身の気持ちに正直になろうと、封印していたトランクを開けアメリカで写真展を開いた。この写真展を見たジェニファー・オルトリッチは心を動かされ、彼の体験の聞き書きを始めた。

92 年、日本でもこの写真展が各地で開かれ、平岡は偶然、福島で開催されるという小さな新聞記事を目にする。すぐさま福島に行き、来日していたオダネルを鎌倉の自宅に招き、彼を励まし、写真説明のすべてを日本語に翻訳、プロデュースし、写真集として作り上げ、出版社へも働きかけた。平岡自身も写真に心を動かされ、行動せずにはいられなかった一人なのであろう。

この中に「少年は気を付けの姿勢でじっと前を見つづけた。」というタイトルの写真がある。「私はカメラのファインダーを通して、涙も出ないほどの悲しみに打ちひしがれた顔を見守った。私は彼の肩を抱いてやりたかった。しかし声をかけることもできないまま、ただもう一度シャッターを切った。」オダネルの心情が手に取るように表れた翻訳で、写真が物語る平和への祈りは大勢の心を打った。



焼き場に立つ少年

（資料提供：鈴木扶佐子 参考資料：『トランクの中の日本』1995 年小学館発行）

2025 年 7 月 7 日

かまくら女性史の会会員 石崎和子 曾原糸子